

空に、白く咲く



月ノ灯り
TSUKInoAKARI

夢を見た。

昔の、幼い頃の夢。

あの頃、願いがあった。

ずっと

ずっと

一緒にいようと、そう誓いあった。

でも、

その願いは誓いは、もろく儂く、壊れ崩れ落ちた。

壊したのは私。

崩したのは、私。

ごめんね.....ごめんなさい.....

「俺、来年東京に行く事になった」

ベッドの中でウトウトし始めていた私に、煙草をくわえた柗時（シュウジ）がそう言った。最初は意味が分からなくて、眠たい目を柗時に向けるのが精一杯だった。

「なに？...出張？」

眠たい目をこすりながら、柗時の点ける煙草の火をぼんやり見る。

「.....いや、転勤」

柗時の口から、煙と共に吐き出された言葉。

頭が真っ白になった。

転、勤？

出張じゃなく？

この街じゃなく、東京に行ってしまうの？

この街じゃなく、東京で暮らすの？

ずっと.....？

じゃあ、私達は？

私は.....？

私はデザイン系の専門学校に通いながら、柗時の勤めるデザイン会社でバイトをしていた。

最初は無口で怖いオーラを感じる柗時が苦手だったけど、同じチームで仕事をする様になって、柗時の印象が変わった。

無口だけど、大事な事はちゃんと話してくれる。

怖いと感じていた存在がいつの間にか気になる存在になって、気付いたら、いつも柗時を目で追う様になっていた。

気付いたら、一緒に帰る様になって、

気付いたら、柗時の煙草の匂いがする唇と重なり合い、

気付いたら、柗時の体温を肌で感じる様になっていた。

それはどれも自然で、

戸惑う事や立ち止まる事もあったけど、言葉は少ないけど柗時は私のそばで、

静かに

優しく

一緒に立ち止まってくれた。

だから、ここまで一緒にいる事が出来た。

私に、どんな思い出があろうとも.....

手を伸ばせば、柗時の広い背中にも少し汗で濡れた黒髪にも届きそうなのに、私は彼に触れたい手を抑えシーツを握りしめた。

そして、シーツの中に隠れた自分の左腕を掴む。

そして、シーツの中に隠れた自分の左腕を掴む。

もうないはずの痛みが、深い傷跡を透して、また伝わるような気がした。

彼の煙草の匂いに包まれ、

思い出す、過去の忘れられない人。

左腕を隠したまま彼に視線を送る。でも、柗時はそれ以上何も言わない。

私も、それ以上なにもきかなかつた。

†

「で？」

「で？……って、それでこの話はお終いだけど……」

専門学校の学食でお昼のおにぎりを食べながら、私は問いかける目の前の友人、凜（リン）に淡々と話す。

「は!? なにそれー？」

凜がそう大きく叫ぶと、口にしていた昼食のレタスとハムのサンドイッチが口から零れた。

「あ！凜っ、サンドイッチ零れてるっ」

私が鞆からティッシュを取り出すと、

「茉樹（マキ）っ！落ち着いてる場合じゃないでしょ!? いーの？ 柊時さんが東京に行っちゃっても!？」

零れ落ちるパンのカケラを気にも留めず、凜はテーブル越しの私に詰め寄る。

たしかに私だって、

「ーで？ その次の言葉は？」って思ったけど、

気付いた。

その続きが、

『だから、別れよう』

でも

『だから、一緒に行こう』

でも、

私の答えは上手く出てこない。だから、聞けなかった。

PPPPPP

廻る思考回路を、私のケータイの着信音が遮った。

ディスプレイの表示は、

[柊時]

「……ごめん、ちょっとデンワ出るね」

私はケータイから凜に視線を移すと、

「はいはい。噂をすれば、でしょ？」

わかったわかった、と凜はサンドイッチにかぶついた。凜は相変わらずだな、とちょっと笑みが零れ、緊張した心がちょっとほぐれた。

「……はい」

《茉樹、いま電話大丈夫か？》

「うん、大丈夫」

《そうか。今日のバイトな、急で悪いが、キャンセルだ》

「え？ なんで？」

《取引先との打ち合わせが、夜まで終わりそうもなくてな。これが終わらないと俺達の仕事が進まない。》

「そう…」

柊時に会えないのは残念で、ガツカリして言葉がでない。

でも、わかってる。

言葉がでないのは、昨日の柊時の言葉を、ずっと、心に重く抱えているからー

《悪いな》

ポツリと呟いた。柊時。

悪いって、何が？

昨日の事かと深読みしてしまう。

柊時は、大事な事しか言わないから。バイトのキャンセルで謝らないんじゃないかと思ってしまう。だって、仕事だもん。柊時のせいじゃない。

「……わかった。今日は、まっすぐ帰るね」

わかった、って、何が？

そう、思いながらも、

バイトにも終時のマンションにも寄らないで、誰もいないアパートに帰る。

そう告げて、デンワを切った。

「物わりのいいフリ、なんかしちゃって」

ケータイを閉じると、凜が全部聞こえていたかの様にそう言った。

「茉樹はね、もう少しワガママになってもいいと思うよ。我慢し過ぎ。バイト休みになったからって行けばいいじゃん。柊時さんの家に」

ちがうよ、ワガママでイジワルだよ、私。

だって、

「...ワザと言った。今日はまっすぐ自分のアパート帰るって」

柊時がなんて答えるか、知りたくてー。

「やるじゃん。で？ 柊時さんなんて？」

「そうか、って」

「だけ？」

「うん.....」

それだけ。

言わなきゃよかった。すぐに後悔した。

「ねえ茉樹？ 柊時さんの事、スキなんだよね？」

凜が真面目な表情で、私を見る。

「え！ど、どうしたの？急に.....」

少し凜から視線をそらし、答える。

「なんで柊時さんについて行くって、遠距離でも大丈夫だよって、言ってあげないの？ なんて、まっすぐに私を見て答えないの？」

ーそれは.....

「待ってるの？.....恭一（キョウイチ）くんのこと？」

ドクン、

その名が出ただけで、視界が揺らぐ。

心が、揺らぐ。

凜は、私の思い出を知るただ一人の友人。

見透かした様に私の心に問いかける。自分でも気付かない、気付かないフリをしていた、その心に。

私は、小5の秋に事故にあった。

通学途中、私と友達数人が歩いている所に車が突っ込んできた。

原因は、飲酒運転。

その時の怪我で、私の左腕には消えない傷跡が残った。

でも、私が傷跡だけで助かったのは、

恭ちゃんが、かばってくれたから。

恭ちゃんが助けてくれなければ、私は、きつともう、ここにはいない……。けど、私をかばったせいで、恭ちゃんは
大怪我をした。

恭ちゃんは長い入院生活の後、やっと登校出来る様になった頃、恭ちゃんのお父さんの仕事で転校する事になった。

別れる時は、哀しくて、寂しくて、涙が溢れて止まらなかった。

そんな私に、恭ちゃんは約束をくれた。

『大きくなったら、迎えに来るよ。だから待ってて。ずっと、ずっと一緒にいよう』

そう約束を交わして、私達は、離れた。

「そんな揺れたままじゃ、柗時さんに言う言葉も見つからないわね」
そう私に言った凜は、授業が終わると彼氏と一緒に帰っていった。その二人の後ろ姿をうらやましく思い、溜め息が出た。
一緒にいられる事がうらやましい。
互いに思いあっている姿がうらやましい。
思った事を真っ直ぐに言える凜が、うらやましかった。
柗時に私も一緒に連れて行って、と言えばよかったのかな？
それとも、
遠く離れても大丈夫、と言えばよかったのかな？
わからない。
どうしたいんだろう.....
私は――...

街の中をあてもなくブラブラと歩きながら、そんな事を考えた。
考えると思出す。
過去の古傷が伝える、思い出の人。
幼い頃に、約束を交わした。大きくなったら迎えにくると、ずっと、一緒にいよう。
と――.....
ねえ、覚えてる？ 恭ちゃん？
私は、覚えてるよ。
でもね、
好きなオトコの人が、今、いるの。

ごめんね……。恭ちゃん。
ごめんなさい、恭ちゃん。

フワリ

その時、目の前に白いものが舞落ちてきた。

なに……？

気付いて、掌で受け止めようとした。私は、その白いものに気をとられていて気付かなかった。
自分のいる横断歩道、

信号が、
赤に変わっていた。

キキィーッ！！

「茉樹！」
「茉樹ちゃん！」

耳に響く車のブレーキ音の中、



終時と恭ちゃんの声が、
聞こえたような気がした。

†

気付くと、知らない景色が見えた。

幾つかのテーブルと椅子、カフェのようなカウンター、そして私を包む珈琲の匂い。目の前のテーブルにはランプの灯りが点っていた。

ここは、どこかのカフェ？

どうして、ここに？

私、どうしたんだっけ？

そんな事を考えて起き上がると、

「ああ、よかった。気がついた？」

優しい声がして、

そちらを向くと、テーブルを挟んだ向こうに一人の男の人。

「大丈夫？どこか痛いところは？」

優しい口調と話し方、向けられる心配そうな鳶色の眼、サラリとした明るい色の髪、

えーと、誰……？

「ああ、状況の説明が必要かな？覚えてる？ キミ、車にひかれそうになったんだよ」

車……

そうだ、車！

耳に残る、ブレーキ音。

そして、愛しい声——……。

でも、

ここには柊時も恭ちゃんも、いない。

夢、だったのだろうか？

それとも、気のせい？

私を呼ぶ柊時と恭ちゃんの声が聞こえた、と思ったんだけど……。

「大丈夫？ どこか痛いの？」

目の前の男の人が、心配そうに私の顔を覗き込む。あまりにその距離が近くて、私は驚いて顔をあげた。

「い、いえ、大丈夫です！ あ、あの……あなたは？ 私はどうして、ここに？」

わからない事ばかりで、その男の人を見て私が首を傾げる。

「彼は、車にひかれそうになって気を失ったあなたを、この店に連れてきて休ませたのよ」

そう言いながら、奥のカウンターから珈琲の香りとともに一人の女の人が現れた。

長い黒髪を一つに結い上げ、黒いエプロンをつけた綺麗な人。静かな口調、儂げな雰囲気だったが、芯の強さを感じさせる目をしていた。

「驚いたわ。常連客の彼が、可愛い女の子を抱えて店に入ってきた時は」

ふふ、と静かに微笑み、

無事によかったわ、

そう話ながら、その女の方は私の前に白い珈琲カップを置いた。

珈琲のいい香りが、私を包む。

「ごめんね。オレも動揺しちゃってて……。いつも行く店が近かったからここに運んじやったんだ。病院に連れて行くべきだったね」

すまなそうに彼は肩をすぼめ、謝る。

あれ？ この仕草――

どこかで、覚えが……

そう、思った瞬間、

知らずに溢れる涙。

あ、あれ？

「だ、大丈夫？ やっぱどこか痛い!? 今から病院に――」

「い、いえ、大丈夫です。大丈夫、です……」

どうしたんだろう？

自分でもわからない状況に、私自身慌てた。

「気が緩んだんでしょう。車にひかれそうになって、気付いたら知らない所で。きっと、珈琲の香りで安心したのかしら？」

黒いエプロンの女の人が、そう言って、ミルクの入った白い陶器と角砂糖が入った小さな瓶をテーブルに置いて、私にすすめてくれた。

彼女の言葉通り、珈琲の香りが私を包むと、

ふ、と心の緊張がゆるむ。

そう、かもしれない。

ひとくち珈琲を口にすると、その温かさと香りがぬくもりを思い出させてくれて、少しの苦みが曇っていた頭と心を覚ましてくれるように感じた。

「落ち着いた？」
穏やかな、彼の声。

「はい、すみません。色々ご迷惑をおかけして……」
涙は拭き、ひいたもののうつむいてしまう。なんだか、彼の前で醜態ばかりさらしてしまって恥ずかしい……
あ、

「そういえば、名前、なんていうんですか？ 私は……」

「茉樹ちゃん」

微笑みながら、

目の前の男の人は、そう名を呼んだ。

——え？

「茉樹ちゃん、

私をそう呼ぶのは、一人だけ。

「な、んで……？ なんで、その名を……」

驚く私の問いには応えず、彼は優しい微笑みを私に向ける。その優しさに懐かしさが込み上げる。

私は、知ってる。

「茉樹ちゃん、

そう呼んで、優しく微笑むただ一人の……

「……恭……ちゃん？」

「うん。迎えにきたよ、茉樹ちゃん」
そう優しく微笑み、私へと掌を差し出した。
優しい口調、微笑み。明るい色の髪。
よく見れば、面影がある。なんで、気付かなかったんだろうー。
「……恭、ちゃん。恭ちゃん恭ちゃん……」
何度も、
何度も、その名を呼んだ。
愛しい、その名をー……。

「約束、覚えてる？ 迎えにきたんだ。一緒に行こう？ 茉樹ちゃん」
差し出されたその掌を掴まえようとして、
思い出す。
柊時の、大きくて力強い掌。よぎる、柊時の声。
触れようとして触れる事が出来なかった、その背中。
揺れる想いで、私の掌が宙で止まる。と、

「茉樹！」
「柊、時……？」

声が、聞こえた。
驚いて、あたりを見回す。
どこから声が？
すると窓の外、暗い夜の闇に、柊時の姿。
「茉樹！」
そう名を呼び、あたりを探しているようだった。

柊時！
ここだよ。私は、ここだよ！

窓にしがみつки、その姿から視線そらせない。窓に映る店のランプの灯りが、ゆらりと揺れる。
闇の中を彷徨う、柊時の姿。
灯りに照らされ窓に映る、恭ちゃんの姿。

私、私は……
私が、この掌に掴まえたのはー……

「柊時！」
私は、名を呼び店を出た。

「柊時！ 待って、行かないで！」
走って、走って、柊時を追いかける。
無我夢中で走った。追いつきたくて、置いていかれたくなくて、ただ柊時の後ろ姿を追いかけた。そしてやっと、柊時のその背中に手を伸ばした。

瞬間、
眩しい光が私を包んだ。そして、

さよなら、茉樹ちゃん

そう囁く、
恭ちゃんの声が聞こえた。

気付くと、白い天井が見えた。

そして、

「気付いたか、茉樹！」

柊時の声。

懐かしい。とても、懐かしい気がした。

「柊、時……？」

そう名を呼ぶと、柊時は、ぎゅっ、と私の掌を握りしめてくれた。

「柊時……。私、どうしたのかな？」

ぼんやりと白い天井を見つめ、尋ねる。

さっきまで、私はカフェにいたはず。

恭ちゃんとー。

「覚えてないのか？ ここは病院だ。茉樹、車にひかれそうになって気を失ったんだ」

じゃあ、あれは……？

あの恭ちゃんとの再会は、夢？

あの時、

「柊時の……声が、聞こえた……」

「ああ……電話のあと気になって、仕事切り上げてお前を探したんだ。そうしたら空を見上げて、赤信号で立ち止まってるお前を見つけた」

空？

そうだ。白いものが降ってきて、手を……。

思い出し、掌を軽く握りしめる。すると、柊時が握る掌と反対の掌に、何かが、あった。

視線をうつすと、掌には白い羽根がひとつ。

羽根？

どうしてー？

そんな事をぼんやり考えていると、

「……よかった。茉樹、無事でー」

震える、柊時の声。

大きくて、力強い柊時の掌。その手が、微かに震えていた。

あたたかい。愛しい掌。

離したくない。

そう、思った。

「約束、果たさなくてよかったの？」
一つに結び上げていた黒髪を、片手でほどきながら彼女は言葉にする。
さらに、と長い黒髪は揺れ、彼女の表情をより神秘的にみせた。

「……はい。いいんです。茉樹ちゃんに必要なのは、オレとの約束じゃなく、彼の掌。掴んで離さない、あたたかく力強い掌でした」
青空のもと、
そう告げる恭一は、はっきりと、でも、寂しげにそう呟いた。

そう、最初から気付いていた。
茉樹が、彼——柊時を選ぶことは——。
なぜなら、あの時、
車にひかれそうになった、あの時、
茉樹は恭一の声のする方ではなく、柊時の声のする方を、振り向いたのだから——……。

「せっかくあなたが約束を果たせる様に、彼女の魂を迎えに行ける様に、ここまでやってきたのに」
そう言うと、彼女は黒いエプロンを外した。
その背には、白く、大きな、翼。

もし、茉樹が恭一の方を振り向いていたら、`ちゃんと、彼女は車にひかれていた。
『大きくなったら、迎えに来るよ。だから待ってて。ずっと、ずっと一緒にいよう』
その彼女との約束を、果たせていた。
「これで、いいんです。茉樹ちゃんには、笑っていてほしい。元気に、綺麗な青空の下で」
そう、言い残し、恭一は飛び立つ。
白く綺麗な翼を広げ、青空を、青空の
その向こうを、目指し——

ひらり、白い羽が、舞い散る。

あの時、茉樹のもとに舞い落ちた様に
、

白い羽が、
青空に咲いた。



恭ちゃんが亡くなったと知ったのは、それから2日後。
初雪が降った日、死亡通知が届いた。

私が事故に遭いかけた前日、交通事故にあって亡くなったのだと知り、
小さい女の子を助けて車にひかれ、その女の子はマキという名だったと、知った。

泣いて、
泣いてうまく息が出来ない。
苦しくて、
苦しくてちゃんと眠れない。
全部が苦しくて痛かった。
恭ちゃん
恭ちゃんー
何をどう考えればいいのかわからなくて、
何をどう想えばいいのかわからなくて、
名ばかり呼んで、泣き続けた。
柊時は、そんな私に何も言わずそばにいてくれた。慰めの言葉も、叱る言葉もなく、
ただ、
苦しい時にはそばにいて、力強く、優しく、抱きしめてくれた。

やっと、
恭ちゃんのお墓参りに行けた頃には、季節は春になろうとしていた。

「ごめんね、恭ちゃん。ここに来るまで、とても時間がかかっちゃった……」

空気の綺麗な青空の下、白い花を手向け私は話しかける。

「今日は、恭ちゃんに会ってもらいたい人がいて……どうしても、恭ちゃんに会ってほしくて……」

私がそう言うと、隣りにいた柊時が私の掌を、

ぎゅっ、と握りしめてくれた。

「茉樹を、東京に連れて行ってもいいか？」

静かに、でもしっかりとした口調で柊時が話す。

「茉樹には恭一という大事な人がいる。それでも、俺はその想いを抱く茉樹を、全部抱きしめてやりたい。だから、俺とともに茉樹を見守ってほしい」

柊時の言葉に、涙が溢れる。

「ごめんね、恭ちゃん。約束、守れなくて――。私、柊時が好きなの。柊時は、愛しい大切な人なの」

風が、なびく。

芽吹く樹々が風を受け、音をたてる。

「だから……さようなら、恭ちゃん。大好きだったよ」

別れを、告げる。

想いに、

揺れる想いに、別れを。

どうか、
これからは私の思い出の中で生きて下さい。

そう、願う。
わかってる。自分勝手に、ごめんね。
私が壊した約束。
私が崩した願い。

でも、
それでも今、手放したくない想いがある。
痛く苦しい思い出と罪悪感を抱いても、それでも――
また涙が溢れ、流れそうになると、

サァァー
風が吹く。優しい風が。
その風は、私の涙を優しく撫でた様に感じた。

風は、手向けた白い花の花びらを舞い上げる。
風は、どこからか粉雪を運び、舞い散らせる。
舞い散る、白い花。
舞い散る、粉雪。

あの日の白い羽の様に、
青空に、

白く咲いた。



空に、白く咲く

[一完一]

空に、白く咲く

<http://p.booklog.jp/book/57193>

著者：月ノ灯リ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tsukinoakari/profile>

素材お借りしました



感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57193>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57193>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ